

寛永諸家譜

清和源氏壬四冊之内  
滿政流

52

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186( 52 )		
函號	附	76	1



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak









水野 乾

寛永諸家系圖傳

清和源氏

十一

滿政流

水野

淺草文庫

家傳より先祖多田海仲此  
鎮守府此將軍源滿政よりあり  
滿政の子と誼奥忠重こゝ忠重此  
子と後河守定家少子定家此子と  
後河守重家こゝ重家此子と後



来

源右重實の二子信濃と重を子  
小川三郎重房其子小川又三郎を信是  
小川三郎重房其子小川又三郎を信是  
移くはわりの野に移すといふ

又三郎

天福年中鎌倉小あ

雅經

下野守

尾別英比彌の心小河村北比頭  
文永元年八月廿五日  
信右重實

雅繼

下野次郎

文永元年八月十日の譲状



翌年十二月七日父が旧業とつゞく小石村  
の比頭職と成りて將軍家政所此書これ  
あり

弘安元年十一月卒す 法名覺妙

胤雅

下野守

弘安元年十一月廿六日父に讓牒とりつゝ  
曰七年十月朔日父が旧業とつゞく地頭

職を成りて將軍家政所此書これあり  
会身よこの成りハ弟の成り

某

下野九郎入道

元亨二年五月廿五日常業讓りて眞  
古川隆奥と成りて眞が論文これあり其文  
言録失と



果

小河下殿又次郎

源重義より届して堀河に別あひび

小姓と軍切とくげまう又もよまう

かつく関東より

観念二年十一月廿二日重義より書きた

まふ

曰二年閏二月廿日合戦の好む氏の旗

長

四

下に届して別あひび

同年三月十一日重義より書きた

け間敷代中様

● 貞守

あ野苑人

宇重軒坤院と建立す

文明十九年五月十八日死を五十一歳

至宝全通二号す茶毘此好二日ありて



会利穀粒と記す

果

永正十一年十月三日  
寶幢賢勝と号す

果

下野守  
一初金州と号す

忠政

大徳大吏 父の家督と号す  
天文十二年七月十二日卒と  
太溪聖雄  
と号す

果

叔七郎

元龜二年十二月廿二日  
安光正念と号す



信元

下野守 三河新瓦城主

天正三年十二月廿七日信長のためり  
害せしむ 信長が英鑑光

女子

河白室

女子

女子

新原の松平紀伊守の嫁と鳥居左京亮が  
外祖母なり

信直

坂九郎

永禄三年四月十九日今川義元伊賀元  
と信直にて新瓦とせむ時信元池上  
して信直留り教急よせり入る  
信直討死信元家老等馳集りて伊賀



女子

亂と悉く討殺して城令き幸と得  
しり

贈大綱言廣忠彌小嫁と御方也

号す

天文十一年

東照大権現御誕生あり

享長七年八月廿九日薨と七十五歳

傳通院殿光岳管養知香大禅定尼

号す

忠守

織部

尾別智多郡小河城自中成之兄

下野守信元之志とあり世々三列の門

守り小く度々戦ひあり

て小河乃城と立在り

大権現了了と号す



天正十八年

大権現関東津入國に好忠守 作とらげ

まろくく相川玉繩に本城とまろく

兵士二三の丸とまろく志し又玉繩の

と而れ代炭小行かせて厨料と忠守り

たまり志むく津懸と小あづるを後

大権現の治と信く子忠えが似比相川に

目弼と玉く閑長一数年と経く卒

す年七十六 法名芳心

守重

多々 職部 法名宗三

守元

多々 法名一法

春守

同様也 法名宗全

女子



守正

小倉

元和四年

台徳院殿と稱しなり此のち

將軍の御書院番と云

と云

守次

孫若湯

元和四年

忠元

監物

知かれ時

大権現の御

台徳院殿よりなり度々御

知りの御



安長十年

台徳院殿將軍宣下の時忠元從又宣下に

叙せし事

大坂御陣前

台徳院殿の侍より後く湯水性組の番頭と

なる湯を陣れあひて組中の兵士

と指揮して侍等と

その後下野國の山口鎧城麻呂板橋

きびよは別れ心ゆく三方よりと

たましく政勢とあづらきく

元和六年十月六日江戸ゆく卒と

歳甲午丑 法名体前宗羅

右馬允

重家

勘八郎

重勝

某

左衛門

五郎三郎



元吉

友直

台酒院殿

將軍家一統之人也

元正

小十郎

寛永十二年八月

將軍家と御一統

忠告

監物

九歳の時

台酒院殿の治を極く父が家督とつゞく

す此遺詔とたまふ

寛永七年從わ位下に叙し時より十

九歳

同十二年八月四日



乃軍家の仰よほく舊領とありた女

後列田中の城少く一石とく之

たま時よ二十日歳

日十九年七月廿八日田中と河守安

三別名田北地とたま時よ三十一歳

忠久

主膳

元春

権五郎

女子

女子

女子

近信

傳兵衛

近之

傳龍

近廣

次島右衛門



来

孫平重

今川氏志がきよめよ自害と

女子

屋鍋 中山氏が書

中山氏を忠政が忠人なり

女子

尾列大守れ水野大膳より嫁と

来

坂次郎

織田信長より属と

天正六年十二月八日信長よ志がひく

撰列を思ひく討死時小口十二景

心得全る也号と

分長

三橋 海守 後よ源正二あし心

天正十二年長久も御陣の時あり野



惣兵衛志をい属して軍切とらげ  
より首級と取らる

同十八年山内系陣の時惣兵衛志は志し  
むいゝ教向とこりどともなきて惣兵衛  
かあとのまのこころこまな

大権現少湯一なり 約命に悔く病生  
花深雪氏彌一なるく先陣と成  
く奥別 九郎は教向して戦切あり  
長四年

大権現よりく大津番れ頭となり

同五年同系陣れは守とらふ

同六年尾別小河はあゝく能化一万

石とたふ

同九年六月廿二日從五位下に叙す

大坂を度れ御陣より侍

元和二年

大権現豊洲の好介長守より

びりく







元和二年

台德院殿の命に依り来地千石と

成り

台德院殿

將軍が御入海あしびは日光沙社

の時あしびくは御あしび

同六年父合長頼房郷小属して

知り一石あると成りしにあり元

徳三別新地あしび一石あり一石あり

地とたふ是合長がな成りしに依り

なり

寛永元年

台德院殿の御入海

將軍が御あしびは御あしび

同九年十一月十日 御命小属

養者あしびは御あしび

同十年に別三別れ御あしびは御あしび

の地とたふは御あしびは御あしび



元治

寛永二三年一わ大坂御書と御書  
ろねら大坂ちびよ二條より  
在書すり事と御書六夜

元治

大和守

將軍家と御書

女子

松平白飯政家忠が妻

義忠

清六郎

知少の時

大権現あはれ久し

天正十八年 仰よ御書大坂御書

少なる

同十九年二子の来地と御書



のち

仁徳院殿よりつるまゝ

文長七年十月十一日死す年三十

六 江山を壽少と号す

重央

散次郎

對馬守

出雲守

知州此時より

大権現より治之たりとす

天正四年 治之治く大沙着此政

とす

慶長六年 従五位下に叙し對馬

守り候と

曰十二年

大権現の命より治く新宣郷より治之

く家老となり常列水戸の内にて

一万石此比と願どる乃ら新宣郷

後列を別と願どる時重央

大権現此命に依りて遠別濱松乃



城自こりつ〜二万石此地と似て

元和五年頼宣御後列を列と

あ〜あて紀列は梅子河重典

新交れ地と〜ま〜つ〜二万石

と似て

旧七年丙午二萬石〜と似て 法若

月山淨春

長勝

大花お輝

勝政

松平豊前守 系當別とれあり

女子

大園弥平次が妻

重良

坂次郎 淡路守

安長十二年

大権現と似〜な〜り〜と〜れ〜ら







女子

頼宣弼の家臣小笠原長房の尉

茂門の妻

女子

松平の校守康隆の妻

女子

有馬出雲守長右衛門の妻

定勝

坂次郎

下総守

寛永元年

台座院殿

將軍の御下取りに御下取りに

台座院殿に命を仰ぐ

將軍の御下取りに御下取りに

同六年法書院番あ入

同七年従ふ御下に御下総守に

御下

同十八年

御下海く御下組



の政也なるを

良安 りやす

仁門 にんもん

女子

良令 りやう

之政 のりやう

女子

女子

忠保 ちゆうたけ

清六郎

甲斐守 かいのり

台酒院殿まつるを

元和四年 治よ保くは書院殿の組 しよえん

政となす

同年従五位下に叙し甲斐守なり

仁也

寛永十年



將軍が七百年の地となりしなほりて  
合之を所成領と

女子

皆川市正吉妻

光紹

清名郎

接し書

六葉れ所あり

將軍が御しけりたるまらぬ

元和六年 治は海く沙少性組の番

頭とすくむるよたふ

同九年 従ふ位下に叙し接し書に

何と

同年 又百石とせしにたふ

寛永元年 治は海く湯書院の

組頭となれ

同年 又これ比とせしにたふ部合二

子石

同七年 三十歳ふくむと

法若



大鉄道阿

京鑑

水正

寛永七年父が忠告とたふ

同八年六月

將軍家まつりなる

忠重

友十郎

惣兵衛

和泉守

永禄元年兄信元小あつと川  
義元が兵や尾別智多助小門石瀬  
少く合戦の時一番に徳とあてて  
兄友次郎小一を首級少らむ職田  
に長あまきと受て了れ兄に礼ある事  
と感む

英地書膳を系圖かく乃ぶゆ

隼人正忠法系圖みは永禄元年

と弘治二年一となす



同四年是時より往く河津

大権現の御旗下に属せし是よりしき  
忠重先代元とあり信長より属  
ありて新屋此城主とあり此城は信元  
依久右左衛尉より譲りし信長此  
下りて寄せし子信長新屋とあり  
依久右左衛尉小たふ依久右左衛尉  
是より後信長元と飛なりと事と  
くわく忠重とあり此より往く河津

がまむ信長卒をれ好こむ

大権現の依久守る

同七年乙卯の賊流石川新七郎と  
安祥の細繩よりしき  
年人正系當  
は七年とあり

ふる

同十二年正月廿一日

大権現今川氏志を別魚川の地とせ  
めたふ時忠重氏志を兵也天皇  
戦くとも勇士とあり軍切とあり



す

元龜元年六月に別小谷ありびり

姉川合戦の時軍切あり 年人正系當

同二年十二月廿二日を別三方原合

戦の時軍切あり

天正二年忠重大久保七良左衛門忠世也

と神主内裏とを別大居にせむる時

比取険阻小一て廿女お水一が

一七卒も又つぎぬ海さ小兵城引

ぬくゆんごせと天將記と志す

て討んゆ中忠重忠世に相好く志

はしひとなつてゆせき戦くつぬ

軍とまらふ一て歸ふ 年人正系當

同二年武田勝頼三列吉田の城とせ

めんし中味兵門とひひくあつた

ふ時忠重軍切あり敵兵鉄炮と

なつて忠重が右れ骨にあつたま肉

の内よあつちぢふ取とみ戦



事ありしは予は是も憶くたのちに  
と持く士年と下知と長原合戦  
此時麻とひしじしとさくごひを事  
とゆと

年人正系當り膳頼を思ふ予は  
事を始くして右の臂と左の臂

りたり

同七年言天神此陣とわじし  
忠年いしみ物くまじく軍切とば

予翌年信長感状とるくも  
言天神とせめくを陣とる事三年  
同十二年四月長久も合戦此時忠  
大次實又高橋の陣系小平を  
豊後守丹羽勘次等也同トく先  
鋒とあつて三好孫七秀次が兵と  
付く大ト是と危婦りあまの首  
級と得る時味方の軍利とら  
しん水と忠年從兵八人としぬ



く力<sup>ちから</sup>戦<sup>いくさ</sup>して敵<sup>てき</sup>と母<sup>はは</sup>せぐ取<sup>と</sup>味<sup>あじ</sup>ふれ兵<sup>へい</sup>  
死<sup>し</sup>まらんをのま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup><sup>く</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>一日<sup>いちにち</sup>の<sup>の</sup>力<sup>ちから</sup>

大<sup>おほ</sup>権<sup>けん</sup>現<sup>げん</sup>大<sup>おほ</sup>敵<sup>てき</sup>と母<sup>はは</sup>を<sup>を</sup>事<sup>こと</sup>あ<sup>あ</sup>兵<sup>へい</sup>兵<sup>へい</sup>取<sup>と</sup>

おさめて小<sup>こ</sup>幡<sup>はた</sup>入<sup>い</sup>く小<sup>こ</sup>牧<sup>まき</sup>山<sup>やま</sup>は<sup>は</sup>海<sup>うみ</sup>らん

忠<sup>ちゆう</sup>を<sup>を</sup>ガ<sup>ガ</sup>中<sup>ちゆう</sup>さ<sup>さ</sup>く今<sup>いま</sup>秀<sup>ひで</sup>吉<sup>きち</sup>

龍<sup>りゆう</sup>泉<sup>せん</sup>ち<sup>ち</sup>小<sup>こ</sup>あり<sup>あり</sup>中<sup>ちゆう</sup>智<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>神<sup>かみ</sup>忠<sup>ちゆう</sup>勝<sup>かつ</sup>

士<sup>し</sup>率<sup>りつ</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>戦<sup>いくさ</sup>う<sup>う</sup>す<sup>す</sup>勇<sup>ゆう</sup>氣<sup>き</sup>程<sup>ほど</sup>さ<sup>さ</sup>ん

なら<sup>ら</sup>戦<sup>いくさ</sup>入<sup>い</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>さ</sup>不<sup>ふ</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>こ<sup>こ</sup>を<sup>を</sup>敵<sup>てき</sup>か

な<sup>な</sup>す<sup>す</sup>敵<sup>てき</sup>を<sup>を</sup>一<sup>いっ</sup>戦<sup>せん</sup>ひ<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>天<sup>てん</sup>下<sup>げ</sup>に

勝<sup>かつ</sup>利<sup>り</sup>と<sup>と</sup>た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ん

大<sup>おほ</sup>権<sup>けん</sup>現<sup>げん</sup>涉<sup>せつ</sup>思<sup>し</sup>意<sup>い</sup>母<sup>はは</sup>を<sup>を</sup>人<sup>ひと</sup>是<sup>こゝろ</sup>と<sup>と</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>る<sup>る</sup>

た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>く<sup>く</sup>は<sup>は</sup>ね<sup>ね</sup>よ<sup>よ</sup>兵<sup>へい</sup>と<sup>と</sup>引<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>小<sup>こ</sup>牧<sup>まき</sup>山<sup>やま</sup>

せ<sup>せ</sup>た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ん

旧<sup>きゆう</sup>年<sup>ねん</sup>足<sup>あし</sup>田<sup>でん</sup>の<sup>の</sup>監<sup>かん</sup>天<sup>てん</sup>智<sup>ち</sup>又<sup>また</sup>大<sup>おほ</sup>馬<sup>ば</sup>が<sup>が</sup>小<sup>こ</sup>あり

と<sup>と</sup>家<sup>け</sup>を<sup>を</sup>治<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>城<sup>しろ</sup>と<sup>と</sup>せ<sup>せ</sup>む<sup>む</sup>る<sup>る</sup>は<sup>は</sup>忠<sup>ちゆう</sup>を<sup>を</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>

び<sup>び</sup>小<sup>こ</sup>子<sup>こ</sup>勝<sup>かつ</sup>成<sup>せい</sup>を<sup>を</sup>み<sup>み</sup>た<sup>た</sup>く<sup>く</sup>つ<sup>つ</sup>く<sup>く</sup>城<sup>しろ</sup>外<sup>がひ</sup>と

や<sup>や</sup>母<sup>はは</sup>を<sup>を</sup>島<sup>しま</sup>堤<sup>つゐ</sup>お<sup>お</sup>ひ<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>戦<sup>いくさ</sup>切<sup>きり</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>城<sup>しろ</sup>つ<sup>つ</sup>お



小幡盛子

同年六月 澁川一登と豊後の城

せひつ時忠を丹羽勘次と同一く一

方とがえんぐ軍切あり

同年十月

大権現秀吉といふこと和睦あり

大権現兵とあえんぐ ためし時忠を先

堀別業治町屋小治と秀吉は大军

少川と福く射陣と秀吉も又業

若小入事と時どと後忠を承あり

秀吉よりつふ秀吉忠を業名射陣

此事と感と又比年

大権現ありとてく教度此軍切とあり

いと事と貴とて石川出雲守教正

初は伯耆 こと同一く武者守りありとて

同十五年七月晦日豊臣の姓とばり

従五位下に叙し和泉守よりほど

同年筑前陣 同十八年小田原陣此



時秀者あまうづろく教向と

支長三年秀吉薨して後石田治了

が物三成等おともに流黨としりんと

大権現よりうむんやと

大権現伏見あゆし申す時忠をつ称小

染より河津と

大権現の治忠を急難れ時よあつて

来くも後せずこふ事ありと感

たふ

大権現あつて大坂小治時あやう

き事あんゆす忠を御前とらふ

さす共切すくおが

同五年石田三成謀叛れ時忠を拜

ふあり

同年七月十九日三河地録射しく不

慮れ愛よりあつて石田が黨の形に

跡八郎ふしと申す忠をも又跡八

郎と討くおもに死す時忠を



年六十 法若賢忠道号勇心

勝成

小名園松 坂十郎 六郎 日向守

天正九年勝成十六歳少く諸約ある

く言天神の地とせり曉と合く首

級と得しり時信長感状とづく

帛従あまゝ軍切あり

同十年小條氏並兵と甲別とあして

大権現と新府と對陣此中勝成鳥居

矢重の三宅惣右衛門の一回く信長

右府中にさしゆく陣とく新小條

鳥居三坂とあく横口と陣とく火と

村里よりあし勝成鳥居三宅とあしに

あせぎたふ勝成内政果と討つるを

ふり敵兵敗乞と法将首とまきる

事おのく教百級乞と新府小條

は道ばまれりけ首と敵陣の前



う〜たふ是〜倭く氏と和とふ  
同十二年四月九日長久の合戦此時一  
番〜首と斬〜本陣小陣〜道と  
敵と

大権現内藤曰く藤つる才主水と家ト  
〜軍中此神と見え〜兵とす先  
たふ井伊兵初め神並政先驅なり  
勝成並政〜と〜事とい〜  
急〜敵陣小かけ〜黒母衣ひ〜

兵三人とさふけ日とつ〜首とき  
事二級

同年是日初盟天時また藤つる一取の本  
治の地とせむる時勝成父忠をよき〜  
〜城妙とや姉川〜戦切あり

同年六月十七日澁川一益〜入  
時勝成澁川三九〜兵と〜  
物せ〜と合せ二ヶ所此戦と  
山



大権現オホケンゲンと勇切ユウキと威イト下シタふフうウけケら

諺ことわざ云いふフくク飛トビと父チチのノ心ココロををくクてテ諺ことわざ者モノ

と少すく路ぢ一いつ地ぢ國こく一いつ乞こくく誓ちかははせせ

天正テンセイ十じゅう五ご年ねん秀ひで吉よし筑つく前まへ志しはは教しやく向むか見みこ

すすうう時とき勝かつ成なり心こころごごううままくく如ごと國くに一いつおおめめむ

肥い後ご國くに一いつ少すくううままくく依よ陸りく奥おくをを成なり

政まつりごと一いつつつふ

同どう年ねん肥い後ご國くに總そう部ぶ領りやうのの公こう府ふ北きた城しろ一いつ

ふふままつつくく逆さかささああるる時とき勝かつ成なり政まつりごとふふまま

かかつつけけてて乞こくく勝かつ部ぶ門もんとと開ひらく

ああくくたたふふととりりどどもも不ふ回くわい乞こくくととせせり

おおししてて總そう部ぶ父ちち子こがが首くびとと切きららけけ

夜よ勝かつ成なりああららびびはは小こ谷や又また大おほ尾おしのの松まつ下した流なが

平ひら次つぎ等らおおののくく軍ぐん切きりありあり又また山やま崎さきのの城しろ

ととせせんん少すくううままくくけけいいもも城しろけけいいくく

ああくく急いそよよせせめめににももかかここししはは道みちはは遠とほくく

向むか城しろととままつつししくく三さん回かい村むら氏しはは乞こくくとと海うみもも

ららししむむとと何なにいいふふかかららはは家いえにに國くに賊ぞく有ありり



初ガ從僕臣民と引やく成政比可  
引一深とうかつく惣なれ城とか  
こじぬ政乞と申てすやまゆく  
兵と教してふ道とらうく即目り  
惣なれ城と取入るは時勝成先陣  
こぢるか又三田村れ兵も兵糧つきわ  
取毛利輝元兵糧といまんこまけるや  
國賊兵糧の道とらうく立花た近  
乞と相せく時勝即甲く去るぶく

軍四振群なり賊流つめよ引去る  
ぞひく兵糧の通海と坊う又中針  
れ城とせひか時勝成一番に河とらう  
て首二級とまね又所宮れ城とせそ  
軍四あり

日十六年宇志一城く小おり長  
よ属と

日十七年九月志波天草れ賊流野記  
れ時引長は陣と張るおる計







事ありしをて級をす又引長と  
清正と志波此味とらんくつめ  
乞とくす十月朔日本を此城と  
えんぐ女三日のまことせりおとすけ時  
勝成先づけして首一級ととりん  
て本城此下にいらる敵十竹人実出  
勝成が部從敵六人とらんらんす  
てく勝成此仕のありて合戦あるこ  
ゆに勇力とありハますこふ事あり

安長三年秀吉を薨しては石田三成等  
流黨とむして

大権現とらんらんす

大権現伏見此向嶋より涉此時勝成は

事とすく難ふのぞんぐ命とす

えんとてのせしり伏見よおむじに

毎日夜よりく向嶋ふいこるこども

大権現とゆいしをるものと場すこれ

ゆい先勝成取ましく又忠をく勢氣



とやゆふ忠を勝成と中と銘く誓  
て貴泉子及じすんのおまえゆ事  
たうらんこふ又

大権現一言と一げふ 君と勝成  
よまみえ給り我うからすい海と  
たまらんこふ後数年と終る  
け時よ及んく

大権現勝成伏見れ向崎よまき 君の  
難一死らん事と感一終

こふも忠守が一言とおやめす  
ふより勝成一たふ終る勝成が  
思量れ用ゆゆき事と志る一め  
して山名及阿弥とゆき忠守を命  
まき 仰けふは父子れるハ忠と貴  
徳とすまやく和睦す一忠守  
貴家のうじまかこまに海くすれ  
し勝成と名とせく是よまみゆ  
其後勝成



大権現と相する事と得る

大権現と志志ありと感したる

るれら

大権現取あつて大坂よりゆき終ふ時

危殆此事あり志を勝成御前

伺作して志をくも湯切らば

いふことすし志志いふくありけり

日五年

大権現會津小東証せんして兵と教

一終ふ時勝成信をす七月又志を

害せざる勝成

大権現此命に悔く父が志とつて

新屋の城自こなる

日年八月東國此兵敗年とせめらる

河津が陣と樂田より強て松下石見

守がまりの取れ者祢れ古城とせん

こす井伊兵部少輔正政を多中務

大権現勝成より是と海より



むい時崎津之鉄炮足野のたし  
あり九月十四日勝成赤坂まで

大権現の湯一なり御旗本にあらん  
事と言とす

大権現勝成り命じて治けるは  
軍用運道此通詔なり汝堅固に  
ふ建と油り之ー十五日関原合戦勝  
成りびよ半市正曉方よ柴田とや  
母の町に入敵兵母せぎたかふ

勝成継とく敵とく一為一島堤  
是田跡原に其首とゆく一む又大垣  
此城此二の丸と尾母家時高は首  
級と増く火と町はく一なつて兵  
と林寺れ口一おさめくこれら使  
を関原に軍中につりて勝り  
成言上ーけさば

大権現威候一給ひく使者と云は  
其令とたふ十六日此東大垣此城よ



ありー相良はさ清秋月長つる橋  
尺近三人書とせく勝ありびは  
母波もつらつげいこく三人と  
にすけえな傾安堵れ書とまじり  
福原右馬助ありびは進言に元木村  
垣内父子垣見和泉も首と切く  
とらんあはれとゆりす又約しけ  
るは伴れ首とさる旗とあはれ  
旗と見はかの城の中に入へり

十八日城はあり相良兵起り木村  
父子進言垣見首とゆりめく  
して旗とゆり時よ勝成銀本と節  
二旗二本のせく城へ入母波も十五  
日此合戦ふとさる事といふは  
将とあはれひのく城とせん福  
原右馬助せく殺くあも敗乞す勝成  
俊と城中につりてか、野にが子  
とあはれはつと安堵せびべと



不福原命に直して、野にけり子とお  
まゝとあけくれり、

日十月五年五月十一日従又恒下に叙  
日向小畑と

同十九年大坂陣の時

大権現御旗と恒吉ふたき終ふ勝成

約命に帰く大和れ無あびは魂丹後

与丹羽助分等と引ぬく恒吉れり

陣といふ十月朔次は波吉様あ

瀬とせりゆふけし時勝成と永井右近

一之河く見ふ(ま)れ命とけ

なまり草鴻より新あけりいり

そるのたきちと見おつてあ人恒吉

又ゆんこす勝成いり我の丹後

こを家室にそまつてあ波吉とあそ

いれへり右近がいりあ使命とけ

て爰よりああ使又回りくゆり命

とくして可あしりぬくま



家取勝成水と申す事可くしりし  
うて主取野次賀が兵河波能と  
おそひし家日月九日取生に敵方  
よる天満北船場浦常鴻と火と申す  
て城中に引入

大権現天満橋の事とこそせたまふこと大  
敵兵に河く鑛炮と申すつゆと申す城  
見事ありしと

大権現勝成と家一して見せしと

と勝成命と申して中け家河國の  
兵天満よりありし木と申す楯柵と  
申す城とせしる川と後取ハ船場町  
小入河國の兵と河色と陣と張て天  
満橋おつ家より三分二なりと其後  
大坂和勝となつておのく由陣  
元和元年大坂再乱れ時

大権現ハ二条北御城よりく

名徳院殿ハ伏見北城より河野の時河井



新紫政士井大炊政成瀬年人正安版  
常刀本多三弥今とらけたまひつ之  
勝成とりて傳くいそく松倉豊後  
与坂丹後与同之在奥丹羽式部神保  
長三郎別下孫次郎兼山伊賀守  
曰た奥作曰た近本多系林山右近  
友寺の監山是若書多賀た近村越  
二十郎甲斐衣衣右徳の爲勝成といく  
く是といひぬくも陣すべしと映又

敵と傳くいそく大和口と陣く先陣  
藤堂和泉与井伊掃部政成と藤十合  
せくそ朝とたふりなほ近江右とらん  
して兵又よ梅多事りれり軍  
はとろじく者あはとみやふと是と  
誅すし勝成すふら兵といひぬく  
長比よしそ大坂れ兵助山と焼す  
とつくいそ近南助といそり松倉十九  
徳奥田三良左衛門といそく梅と立そく



浦より敵兵南越り入りありし事

又月四日

台徳院殿より貴令五十枚とたまふ五月  
五日此日大坂より一軍を多々濃  
松平下総守陣と南の山下にはる  
勝成中山勘兵衛中村勘次郎助三回く  
陣屋より一軍を和と見ふる英徳寺  
使とせしむるに勝成は山小陣  
と礼庵一我を國府小陣とせん

人皆可なりとす勝成いよく河内  
地形より一かすして敵兵れ  
も入とうかひしし國府の山は陣  
とせんあは志しし松明敷千歳  
井寺に在る志ししくの福ゆきま  
ゆらと見れ勝成敵兵最井をいあり  
こさゆらと組中れ兵より下りて  
浦とせしむる是と侍敵れゆ後友又兼  
友井より英徳寺の宮とゆき大和



あまのこしきま 榊 勝 一 片山 みののぼつ  
て 鉄炮 とくまの 松金 奥田 曾お 我て  
奥田 曾 教 十人 我 死と 勝成 ころ  
なくと 西 兵と けいめく 我と 接 せ  
時 勝成 が 長子 英 曾 勝 手 びよ 中  
山 物 船 中 町 船 なる 助 曾 馬 一 あり たり  
一 され 橋 と ころ ころ 勝 と けい 敵 と  
く 敵 兵 母 曾 きた たり あり ころ ころ して  
ろ げ たり なる 勝成 が 士 卒 あり ころ ころ 首 切

と 目録 と ころ 是と 次 奈に 然と  
あ 御 下 涉 感 ころ 使者 と ころ ころ 茶 合と  
に ころ ころ 日 敵 村 友 井 寺 此 ころ ころ あり  
勝成 是と ころ ころ ころ ころ 政 家 がい ころ ころ  
勝成 是と ころ ころ ころ ころ 我 ころ ころ ころ  
し 事 と ころ ころ や 我 ころ ころ ころ 我 兵 合  
回 と 敵 ころ ころ ころ ころ ころ ころ 又  
中 命 に ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ  
ふ 事 ころ ころ 勝成 ころ ころ ころ ころ ころ



心く我々と帰る日さくし夕陽に  
及く敵兵陣屋と放火して城中  
小引入七日此朝兵と敵して大坂此  
城めじふ

大権現豊満之膳万子権太尉と勝  
成り命じて治ける膳所合戦  
此敵方いさやじへし士卒も又  
不かく疵とかり悔ふし日かゝす御  
旗切候すべし恒台小耳く侍

酒一よの上意とうけたまはり  
まじくは安部野にいさく越前守  
茶田山とせむるふあて恒台ハゆ  
すて越前此兵と此に赤田兵と  
返ら英作当膳守兵と引ぬる城の  
黒門一入百余此頭とこら勝成場  
乃ち城よりいんこす敵此朝の  
掃部志さうに鉄炮とく行つこさ  
よせに我いと決と勝成馬よりあつ



二年と下知と勝成が家臣廣田尚書  
敵より見之勝成より  
敵と切之者又是より首とすし  
心解久く我々又敵二人と付  
水家より外百餘此首級とす  
敵兵より見敗をと勝成つめ  
梅門より一巻の旗とたつ  
四年丹波とありたれ和別郡  
より六万石と領すと

同二年八月四日郡山とありたれ  
加増とすまつく備前國福山と  
十石とありたれ小城部とす  
西國に鎮清なる家  
寛永三年從四位下に叙と  
同九年肥後國主涉改易此時  
勝成

將軍家此命とすけ之肥前守と  
き詔の同く城部とす後と



同十三年肥前國鴻原郡蘇の初流  
野起と詔將

の軍家此命とうけ之後向とて後  
勝成も又治と呼婦川之援兵  
と引ぬく鴻原におまじう船流と  
たりけり

市正

孫十郎

忠清

隼人正

大権現の命とうけたまはるる國原合  
我の地をうつとも涉旗なり

あさぶ

安長七年從五位下に叙と其

好治と信く

台徳院殿より一人を忠清女一歳  
時涉書院に番改こたり又水養

若番とつとむ



大坂陣此城守とつゝあて我  
にあり

元和二年四月二日後討めく

大権現忠信とありてと壇北國とゆ

る一跡ふこいと忠信是と辭

あくあつこのけりずと井大炊氏

は多と神分下にて回作と松平

右衛門左衛門元祖馬也も又る此

にありあつにおぬく

大権現此城守忠信先祖也忠信

あり且又忠信をう回作とおほし志の

みりず忠信と後大坂にてあ年

はりといふやしもつと軍回とらけ

中一と忠信謀り感におほし

身にあつ本願三列并居此城と

たもふのり恩言もあけご多

忠清命の御ことけり事と

孫して退あ



寛永九年八月十一日

將軍家此迄は依くめされくはる。

おまじき舟屋とありためて之別

台田の城主こなる。

日十一年

將軍家此迄は依くめされくはる。

たふ

日十九年七月廿八日台田とありた

めくは別松本此城子移り二百五

子ふれ此城とありた  
七万石と領と

女子

大権現の道と養子と給ひて加藤

肥後守清正の嫁と給ひて

は清浄院と号す

佐渡守

忠職

お羽守



寛永十一年十二月従五位下に叙す

長女

寛永十八年

竹子代君まつとをむす

男子一人

女子

京極修理大史が妻

女子

山口修理が妻

女子二人

勝重

美作守

従五位下

享長十三年けりやく

公徳院殿まつとたぐまのりる

同十四年従五位下に叙す

元和元年大坂陣の時軍事とに

あしむ事ハ勝成が謗中に詳なり



寛永九年肥後國没収の時勝を

將軍家此命とうけ殊に後馬とたまふ

つゝ肥後小おむじさ城部と詰澤と

同十五年肥前國鴻原小く公利父母

の境増起れ時勝を 御命とうけ父母

成よきうつゝ法為とお好く教向

一兵とすめく城とせむ賊徒皆

たいらぐ

同十六年勝成老年にかぶる海く

はく之と辞す勝重 作と明ぬい

て家督とせむ

同十九年從四位下り叙と

成貞

出雲守

元和五年六月先任と

將軍家よりつゝ成貞

寛永元年八月從五位下に叙と

同年十二月來地千石とたまふ



同二年九月二子ふとを之にたまひつゝ  
功合三千石と領せ

勝信

日記

實ハ市正が子なり勝成是と出給

勝則

織部正

勝忠

右京進

生國三河

寛永三年うゝめく

將軍家と扱へたてまひ給

同六年中奥の沙番取つやむ

同七年年俸二子儀とたまふ

同八年沙膳番とつとむ

同年從五位下と叙せ

同十一年上総の田ぬく二千石の地取

たまふ



勝負

海前守

寛永十五年肥前國鴻原北野

増起北野父勝重にきこくく教向と

同十六年何々々

將軍家と孫一たてまじり

同十七年從五位下に叙と

家紋九内二本澤写永樂鏡

監物忠吾家傳りいらく先祖軍

四あふとひく糸内北野永樂鏡と

指らぬ永樂とひく家紋と











